

中部森林管理局と森林総合研究所等が技術交流会を開催

関係者相互の知見や認識を共有

【木曽署】10月26から27日、木曽森林管理署において、当署職員と各地の国立研究開発法人森林総合研究所研究者の他、木曽地方事務所、長野県林業大学校、岐阜大学、富山県や地元市町村林務担当者、中部森林管理局関係者など約60名が参加し、第7回「中部森林管理局 森林総合研究所 技術交流会」を開催しました。

この交流会は、木曽谷の国有林において、中部森林管理局及び森林総合研究所をはじめとする各研究機関や大学による様々な試験研究や調査が行われており、技術開発及びそれらにより得られた成果の普及を図り、相互に知見や認識を共有することを目的とし、平成23年度より開催されています。

木曽谷の国有林には、世界的に見ても非常に貴重な森林である温帯性針葉樹林がまとまって分布しており、この温帯性針葉樹林を保存・復元することを目的とした「木曽悠久の森」が設定され、この取組は天然更新の重要性が高く、多くの試験や研究が行われています。

また、国内でも有数の木材生産地であり、木曽ヒノキをはじめとする天然林や高齢級人工林が分布し、研究機関や研究者にとって非常に興味深いフィールドでもあることから様々な調査が行われており、これらの調査を含め、様々な調査研究結果について発表が行われました。



木曽署から発表の様子

一日目は、技術研究発表会が行われ、森林総合研究所からは、木曽ヒノキの天然更新を検討する上で課題となっているササ処理と更新樹種の調査、赤沢ヒノキの30年の歩み、水木沢天然林の林分構造について、また、森林管理法の提案や花粉症対策と高齢ヒノキ林の関係について発表が行われ、興味深い話題が提供されました。

岐阜大学からは、アスナロてんぐ巣病がヒノキに及ぼす影響について発表があり、木曽森林管理署からは、御嶽山噴火の対応の取組、天然更新実証試験の報告、森林技術・支援センターからは多様な森作りについて、木曽森林ふれあい推進センター及び南木曽支署からはシカ被害対策の取組についての発表を行いました。

今回は幅広い課題の発表があり、それぞれの課題について関係者から多くの質疑があり、有意義な意見交換の場となりました。

二日目は、小木曽国有林にある水木沢天然林において、森林総合研究所が調査している試験地などを見学しました。水木沢は木曽谷の天然林の中ではめずらしい木曽ヒノキ、天然サワラとブナなどの広葉樹が混交した林分で、木曽谷の天然林が木曽ヒノキを主体とした現在の林分になる前のヒントになる林分でないかということで森林総合研究所では林分構造を調査しています。また、水木沢にある百年生のヒノキ人工林の間伐箇所、間伐効果による下層の発芽状況を観察しました。



現地見学会の様子

今回の交流会を通じ参加者からは、「木曽ヒノキの更新や管理技術をはじめとした技術的課題について情報共有し率直に意見交換できることが大切」、「今回報告された取組が、今後の展開や施業につながるよう協力していきたい」などの感想が寄せられました。

また、発表者からは試験研究結果を事業の担当者や地域の関係者に共有する良い機会であり、今後も継続して開催していただきたいとの要望もありました。

当署としても、この交流会を継続し、広く試験研究成果を普及させ関係者相互の知見や認識を共有していきたいと考えています。